

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「菜穂子は将来何をしたいんだ？」

小学生のころ、母方の伯父に聞かれたことがありました。

歴史に興味があった私が「歴史を勉強してみたいです。」と言うと、伯父が、こう言ったのです。

「本当に学問をするなら、大学までじゃダメだ。大学院の博士課程まで行かなきゃ、学んだとは言えないよ。」

画家であり、大学教授でもあった伯父ならではのケンカイだったと思うのですが、子ども心に、なにか、悔しいというか、そこまでやらなきゃ認めてもらえないんだな、と思うような気持ちになったのでしようね。小学生なのに「博士課程」という言葉が頭に焼きついてしまって、それがきっかけで「自分もいつか勉強して必ず大学院まで行くぞ。」と、心に決めてしまったのだから、三つ子の魂、恐るべしです。

そんな私が小学生のころ、憧れたのが、放射能の研究で女性としてはじめてノーベル賞を受賞したことで知られる、キュリー夫人でした。

いまはどうか知りませんが、私の子どもころには図書室に行くときとズラリと偉人伝が並んでいて、小学校低学年のころ、まるで何かにとりつかれたみたいに、片っ端から、それを読んでいきました。

偉人伝の人たちは、ウルトラマンと違って、地続きのヒーローという感じがしました。エジソンにしろ、リンカーンにしろ、子どもころは度外れて変なところがあつたのです。

完全無欠だから「偉人」になつたんじゃない、むしろ人とは異なる欠点や過剰さを抱えていたからこそ、ほかの誰とも違う道を歩むことになつたんじゃないか。

最初は欠点だと思われていたことも、そうなると欠点じゃなくなるんですね。度を越した欠点こそが、その人が道を切り開くときの、ほかの誰にもない武器になつていく。

おチビで体が弱かった私は、欠点をバネにした偉人たちのギャクテングキに夢中になつてしまつたというわけです。

キュリー夫人にしても、やっぱり、とんでもない欠点がありました。それは、「没頭しすぎる」ということ。

偉大な業績はさておき、幼い私がなにより惹かれたのは、そこです。なにしろ本を読んでいると、あまりに没頭しすぎて、周りがすっかり見えなくなつてしまふというのですから。

彼女が読書に没頭しているとき、兄弟たちがふざけて周りに椅子を積みあげてみたら、それでもやっぱり気がつかなくて、読みおわって立ちあがるたびに、その椅子がガラガラと崩れて、はじめて気がついた。それでみんなに笑われても、本人は、どうして自分が笑われたのかわからなかつたというのだから、相当なものです。私も本の虫だったので、これにはすっかりうれしくなつてしまいました。

(中略)

野尻湖にある祖母の家のヤネウラで、ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』を見つけたときのこと忘れられません。そこは叔父の子どもの時代の勉強部屋で、古い時代の本がそのまま残つていたのです。うつつらと本に積もつていたほこりを払うと、日がくれるのも気づかないまま、夢中で読みふけりました。

私が、あまりにも本ばかり読んでいたので「このままでは実生活がおろそかになる。」と心配した両親は、やがて、本禁止令をだすようになりました。

「部屋を片付けるとか、宿題をするとか、ほかにやるべきことはいろいろある。そういうことをおろそかにするな。」と。

見つかると思われられるから、しまいには、ふとんをかぶり、懐中電灯を持ちこんで、薄暗い灯りを頼りに読んだりもしました。そこまでして読みたいか、つて話ですけど、私は、だんだん本を読むのはいけないうこと、後ろめたいことのように思うようになっていたんです。

ところが、キュリー夫人は、人からどんなに笑われようと、そんなことはおかないし。

黙々と本を読みつづけ、自分の研究に没頭して、ついに単身ソルボンヌ大学に乗りこんでいきます。生活費や食費にも事欠くなかで、学ぶ、学ぶ、学ぶ。赤かぶとサクラソボ以外口にせず、ひたすら勉強して来たこともあつたそうです。

私は、何があるかと揺らぐことのない、あの学ぶことへの飢えに惹かれたのだと思います。

(中略)

なぜ、知りたいと思うのか。なぜ自分が、時の流れや、宇宙の果てしなさや、答えがすぐには出ないことを考えつづけずにはいられないのか。この世界には、未知のこと、わからないことがたくさんあつて、どうしてそうなっているのかを、もつと知りたいと思う。どこから湧いてくるのかもわからないこの気持ちは、たぶん、理屈ではないのでしょうか。

その道を究めたら、どんな答えが待っているかもわからないまま、ただ、目の前の問いと一心に向き合い、学ぼうとする人間がいる。私は、いまでもそういう人に無性に惹きつけられてしまいます。

iPS細胞を開発してノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥さんが、テレビのインタビューの中で、こんなふうなお話をおっしゃつていました。「実験を繰り返しながら、みんながページをめくつていて、最後にページをめくつたときに『あつた!』と言つたのが自分だった、それだけのことです。」と、先人の功績を讃えたのです。ああ、すばらしい言葉だな、と思いました。

エポックメイキングな大発見は、それまで積みあげてきたものがあつてはじめて起こるもの。ぼたぼたとしづくが落ちて、やがてコップがいっぱいになり、最後の一滴であふれたすみたいに、物事が変わるのはつねに最後の最後の瞬間が来たときなのです。

子どものころ、学者や研究者に憧れたのは、そのせいかもしれません。

自分ひとりの努力では、一生のあいだになしえることは限られているけれど、学ぶことでその道を究めようとした人たちは、そうやってバトンを、次の世代、また次の世代へとつないでいくことができます。

人は、生まれて、生きて、やがて死んでいきます。

どんな人も、一回性の命を生きている。そのなかで、いったい、自分は何をなしえるのだろうか。

体が弱く生まれたからこそよけいに、私はそのことをずっと考えつづけてきました。

有限の命を生きるしかない人間が、それでも何かを知りたいと思ひ、それまで誰も解くことができなかったことに挑んで、それによつて、この世界の何かが確実に変わることがある。変わったからとて、いずれは地球も砂になりますから、じつは意味のないことなのかもしれません、少なくとも、生きているあいだ、人の幸せとなる何かを生みだせるなら、それはそれで、意味があるのではないか。

自分も、そんなふうになんかをしる人になりたいと願つた。

学ぶことを志した先人たちがそうしてきたように、何かが少しでも変われることを夢見ながら、自分のページをめくつていかざるをえない衝動を、幼いころから確かに抱えていた気がするのです。

(上橋菜穂子『物語ること、生きること』による)

問一 —— 線部AとDのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 —— 線部1「三つ子の魂、恐るべし」とありますが、ここから筆者がどうなったことがわかりますか、答えなさい。

問三 —— 線部2とありますが、「偉人伝の人たち」は「ウルトラマン」とどのような点が違いますか、答えなさい。

問四 —— 線部3とありますが、筆者はどうして「すっかりうれしくなつてしまつた」のですか。理由を答えなさい。

問五 —— 線部4「学ぶことへの飢え」とありますが、「飢え」というたとえを用いることによつて、どのような様子が表現されていますか。わかりやすく説明しなさい。

問六 —— 線部5「それだけのこと」とありますが、どのようなことですか。わかりやすく説明しなさい。

問七 —— 線部6「一回性の命」とはどのようなものですか。自分の言葉で説明しなさい。

問八 —— 線部7「自分のページをめくつていかざるをえない衝動」とありますが、「ページをめく」とはどのようなようにすることですか。問題文中の —— 線部6以降の言葉を用いて答えなさい。

二次の文章は、米国出身の日本研究者が書いた「自伝」の一部です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

一九四三年二月に海軍語学校を卒業した者の多くは、真珠湾へ派遣された。私たちがサンフランシスコからハワイへ運んだ船は、以前は客船だったが今は古びて汚かった。これまで乗った中で最悪の船で、私が船酔いしたのもこの時だけだった。この航海で、自分が海軍士官に向いていないことを思い知らされた。ついに船がハワイに到着した時、リクチの上を船の揺れを感じないで歩けるようになるまで一週間かかった。

真珠湾では、押収された日本語の文書を翻訳するブシヨに配属された。任務に就いた初日、私たちは現役海軍大尉から訓示を受けた。大尉が私たちを見る眼は軽蔑以外のなにもなく、海軍について何も知らない私たちが自分と同じ軍服を着ることを許されている事実を、明らかに不快に思っているようだった(語学校を卒業して、私たちは初めて軍服を着た)。大尉は、次のように告げた。諸君が携わる仕事は軍事機密に属するものである。自分としては、その機密を外部の者に漏らした者が絞首刑になるのを最後まで責任を持って見届けるつもりだ、と。

こうした愉快この上ない訓示を耳の中にこたませながら、私たちは与えられた文書を翻訳する仕事に取り掛かった。最初の数日間、自分がやっている機密の文書が戦争をシユウケツさせるのに役立つのではないかと思つて興奮した。しかし、文書はどう見ても価値がないものばかりで、強く興奮した気分は長くは続かなかつた。文書は、南太平洋にあるガダルカナル島でサイシユウされたものだった。島を占領していた日本軍とアメリカ軍との間で、長期にわたる戦闘が行なわれ、アメリカ軍が最終的に島を奪還することに成功した。この時期、すでにガダルカナルの戦闘は終了し、そこにいた日本人は殺されていた。しかし、私たちはもはや存在しない小隊に関する日課の報告書や、彼らが所持していた用紙やインク瓶の数量に関する判で押したような明細書を翻訳し続けた。

こうした資料の翻訳はあまりに退屈だったので、それを楽しい仕事にするために、日本語の文書を古風な英語に訳したり、通俗小説の文体で訳したりした。日本語がわかる大尉は、翻訳に眼を通すことがあつた。大尉は私たちを呼びつけ、怒り狂つて「間違い」を指摘し、私たちの英語を海軍英語に訳し直した。

ある日、押収された文書が入っている大きな木箱に気づいた。文書からは、かすかに不快な臭いがした。聞いた説明によれば、小さな手帳は日本兵の死体から抜き取つたか、あるいは海に漂つているところを発見された日記だった。異臭は、乾いた血痕から出ていた。手帳に触れるのは気味悪かつたが、注意深く血痕のついてなさそうな一つを選び出して、翻訳を始めた。最初は、手書きの文字が読みにくかつた。しかし、今まで訳していた印刷物や謄写版で刷られた文書と違って、これらの日記は時に堪えられないほど感動的で、一兵士の最後の日々の苦悩が記録されていた。

アメリカ軍の兵士は、日記をつけることが禁じられていた。敵が日記を手に入れた時に、戦略的な情報をテイクヨウしてしまう恐れがあつたからである。しかし日本の兵隊や水兵は、新年ごとに日記をシキユウされ、日々の考えを書き留めることが務めとされていた。彼らは上官が日記を検閲することを知つていて、それは日記に記された感想が十分に愛国的かどうか確かめるためだった。そのため兵士たちは、日本にいる間は日記のページを愛国的な常套句で埋めたものだった。しかし、自分が乗船している隣の船が潜水艦に沈められたり、南太平洋のどこかの島で自分が一人になってマリアにでも罹れば、なにも偽りを書きいわれはなかつた。日記の筆者は、自分が本当に感じたことを書いた。

日本人兵士の日記には、時たま最後のページに英語で伝言が記してあることがあつた。伝言は日記を発見したアメリカ人に宛てたもので、戦

争が終わつたら自分の日記を家族に届けてほしいと頼んでいた。禁じられていたことだが、私は兵士の家族に手渡そうと思ひ、これらの日記を自分の机の中に隠した。しかし机は調べられ、日記は没収された。私にとって、これは痛恨の極みだった。私が本当に知り合った最初の日本人は、これらの日記の筆者たちだったのだ。もっとも、出会った時にはすでに死んでいたわけだが。

(ドナルド・キーン『ドナルド・キーン自伝』(角地幸男訳)による)

*注 謄写版——印刷の一種。 マラリア——熱帯・亜熱帯に多く見られる感染症。命にかかわることが多い。

問一——線部A～Fのカタカナを漢字に改めなさい。

問二——線部1「その機密を（見届けるつもりだ」とありますが、大尉はこの言葉でどのようなことを言おうとしていますか、答えなさい。

問三——線部2「愉快この上ない」とありますが、この表現にこめられている筆者の気持ちとして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 緊張
- イ 服従
- ウ 賞賛
- エ 恐怖
- オ 反感

問四——線部3「判で押したような」とはどういう意味ですか、答えなさい。

問五——線部4『間違い』を指摘し」とありますが、筆者が「間違い」に「」を付けたのはなぜだと考えられますか。理由を答えなさい。

問六——線部5とありますが、「日記の筆者」が「本当に感じたことを書く」ことができたのはなぜですか。その理由を説明した、次の文の

X X・Y Y に入れるのに適当な言葉をそれぞれ十字以内で答えなさい。

X Y ことを予感するような状況では、Y ことなど気にならなかったから。

問七——線部6とありますが、日記を没収されたことがどうして「痛恨の極み」だったのですか。理由を答えなさい。

問八——線部7とありますが、「本当に知り合った」とはどういうことですか、答えなさい。

三 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

春 山崎るり子

切られるのかと木は言った

高くなりすぎたとおじいさんは言った

また生えてくるさと木は言った

また切るよとおじいさんは言った

くり返しくり返し朝がきて

くり返しくり返し春がきて

木は切り株から芽を出した

おじいさんはノコギリを新しくした

また切るのかと木は言った

高くなりすぎたとおじいさんは言った

1 また会おうと木は倒れた

2 おじいさんは何も言わなかった

くり返しくり返し朝がきて

くり返しくり返し春がきて

木は切り株から芽を出した

おじいさんは家から出てこなかった

木は伸びていった

枝を広げ葉を広げ

高く高くどこまでも

伸びていった

おじいさんはふとんの中で

³ どんどん暗くなる部屋で

伸びていく木を想った

木を想うと

⁴ 木といっしょにどこまでも

伸びていけた

バラバラバラバラ

木は実を屋根に落として

おじいさんと呼んだ

⁵ 枝で窓をつきやぶり

根で家をかたむかせた

くり返しくり返し朝がきて

くり返しくり返し春がきて

おじいさんの分の場所には

木が大きく緑を広げ

雲を押し上げて立っている

北の町から若者が

ノコギリをかついでやってくる

問一 —— 線部1「また会おうと木は倒れた」とありますが、これは何を表していますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 木とおじいさんが、おじいさんの死後にあの世で再会すること。

イ 切り株から芽吹き、時間をかけてまた立派な木に生長すること。

ウ 切られた木が加工され、再びおじいさんの役に立つこと。

エ 切られる木が、木を切ったおじいさんを敵としてうらんでいること。

オ 木は切られてしまっても、木のたましいはその場に残っていること。

問二 —— 線部2とありますが、このとき「おじいさん」が「何も言わなかった」のはなぜですか。理由を答えなさい。

問三 —— 線部3とありますが、「部屋」が「どんどん暗くなる」のはなぜですか。理由を答えなさい。

問四 —— 線部4「木といっしょにどこまでも／伸びていけた」とありますが、これはおじいさんのどのような想いを表していますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 早く自分も元気になって、すくすくと伸びる木をまた切りたいと望んでいる。

イ 体の自由が利かなくなったのに木がすごい勢いで伸びることにおびえている。

ウ 体は動かなくなったが、生長する木に一体感をおぼえ、うれしく思っている。

エ 体が動かなくなったことで、ゆっくりとしか生長できない木に同情している。

オ 木がどんどん大きくなるのに、自分の体の自由が利かないことを悔やんでいる。

問五 —— 線部5「枝で窓をつきやぶり／根で家をかたむかせた」からは、木の生長の様子以外に、おじいさんについてどのようなことがわかりますか。簡潔に答えなさい。

問六 作者はこの詩で何を表現しようとしていますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 木の生命力の強さとたくましさ。

イ 木とおじいさんとの厚い友情。

ウ ノコギリという道具の重要性。

エ 人の一生の短さとはかなさ。

オ つながり合う生命と時の流れ。

